

## 第6節 小結

6区の調査では、縄文時代から近世初頭までの遺物が出土している。また、遺構については、灰色シルト層上面から黒色腐植土層下面の間で弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭頃の集落跡や古代の道路遺構が、黒色腐植土層よりも上で中世後半～近世初頭の河道跡や溝が検出された。ここでは、本書で報告する6区②・④・⑥・⑧のほかに、既報の6区①・③・⑤・⑦の調査成果も加えて各時代の様相をまとめることとする。

### 1. 弥生時代後期中葉以前

#### (1) 砂礫層の堆積時期と性格

6区の最も深い部分では、縄文時代早期～弥生時代後期の遺物を含む砂礫層（VI層）を確認している。この層は、主に花崗岩質の砂礫で組成され、斐伊川の堆積作用によって形成されたと考えられる。出土遺物で最も新しい様相のものは、口縁部に貝殻腹縁による平行直線文を持つ甕で、肩部には貝殻によるノ字刺突文や連続刺突文を持っており、小型・幅狭の刺突文を備えた中・小型の甕は見られない。山持遺跡2・3区の報告（島根県教育委員会 2007）で細分された土器様相では様相2に相当するもので、砂礫層の堆積時期は後期中葉と推測される。

砂礫層の堆積状況から水流の方向を検討することはできなかったが、斐伊川の堆積作用によるものであることから、東から西への流れがあったと想定できる。砂礫層中に含まれる遺物は、本来はこの地点よりも東側に営まれた後期中葉以前の集落跡に存在したもので、水流によって遺跡が削られ運ばれたものであろう。縄文土器には摩滅したものが多いため、弥生時代後期の土器は残存状態が良好であることから、あまり離れていない地点にこの時期の集落があったと考える。

#### (2) 砂礫層の出土遺物

出土した土器の中に、在地のものほかに非在地系土器が含まれている点は注目される。北部九州系土器には須玖系や下大隈式のものがあり、このほかに吉備系、塩町式系、近江系の土器もみられる。とりわけ目を引くのが朝鮮半島系の楽浪土器で、6区⑦では完形に近い壺が出土しており、6区①・③・⑤でも破片が計8点確認されている。これらの遺物は、山持遺跡が他地域との交流の窓口としての役割を果たしていたことを示すものといえる。

### 2. 弥生時代後期後葉～古墳時代

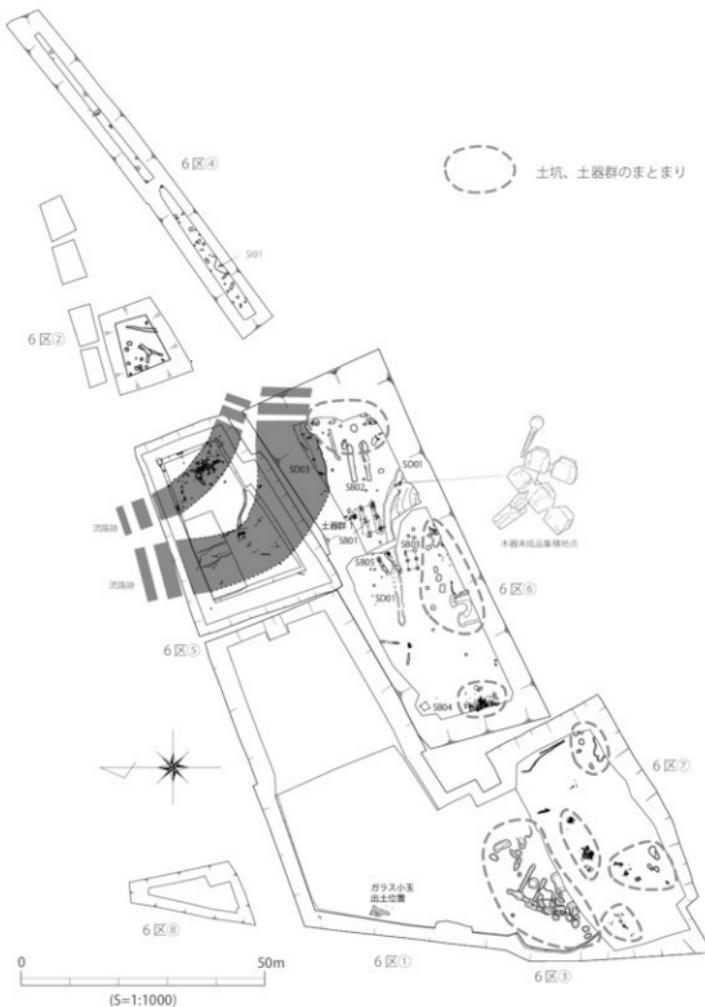
#### (1) 遺物・遺構の検出状況

斐伊川の堆積作用の影響を受けなくなり、砂層の堆積が見られなくなると、その上部にはシルト及びシルト質細砂（V層）が堆積する。シルト層にはほとんど遺物がないが、その上部に堆積した黒色粘質土層（IV層）には弥生時代後期後葉以降の遺物が含まれている。遺物の出土は草田3期からみられ、草田4～6期（特に5期）にピークを迎える。この時期の遺物には、西部瀬戸内系や中国山地系の土器、朝鮮半島系の三韓土器もあり、前代に続いて山持遺跡で対外交流が行われたことを示している。

遺構についてはシルト層上面で検出しているが、発掘調査時の状況から黒色粘質土の堆積過程で生活面が形成されて、遺構が掘り込まれたと考える。遺構のほとんどは弥生時代後期末～古墳

時代前期初頭頃（草田4～6期）のものと推定される。

古墳時代前期（草田7期）以降になると遺物は急減し、明確な遺構も存在せず、居住・活動域がほかへ移動したと考えられる。ただし、6区①では75点のガラス小玉が出土し、そのうち74点が赤褐色を呈する「ムティサラ」で、これらは古墳時代中期に属する可能性がある。このことから、一時的にせよ何らかの祭祀行為がここでなされたものと推測される。



第132図 山持遺跡6区 弥生時代後期後葉～古墳時代の遺構

## (2) 遺構の性格

この時期の遺構として、掘立柱建物跡5棟、竪穴建物状遺構1か所、溝・流路跡、土坑などを検出している。これらの性格について検討することとしたい。

掘立柱建物跡(SBO1～05)はいずれも6区⑥で検出された。このうちSBO1・02・05は布掘建物で、建物の沈下を防ぐため、柱の下に礎盤を作うものも存在した。布掘建物については東柱式の建物の可能性があり、規模や構造から倉庫として機能したものと推測される。他の2棟については、倉庫や小屋、物置のようなものと考えられるが、布掘建物と比べると礎盤を作わないなど簡易な構造であり、性格が異なるものであったと推測される。

竪穴建物状遺構は6区④で検出している。ただし、柱穴や壁体溝は確認できず、竪穴建物跡とするには決め手を欠く。また、遺構検出面の標高は2.2mで前述の掘立柱建物跡の検出面と大きな差ではなく、はたして低温な状況下で竪穴建物跡の構築・利用ができたのかということも問題である。掘立柱建物跡を倉庫とみた場合、居住域がどの部分に存在したか検討課題となる。

溝・流路跡のうち規模の大きいものは6区⑥で検出されている。SDO1は長さ32m以上、幅0.9～2mの東西方向にのびる溝で、木器未成品が1か所に集積された状態で出土している。埋土は水性の堆積を示しており、製作途中の木製品を水漬にして保管していたと考えられる。こうしたことから當時一定量の水を湛えており、水路として機能した可能性も想定される。また、建物跡や土坑、土器群の分布状況から、この溝の北側と南側で遺構群の単位が分けられそうであり、集落の区画も兼ねていたと推定する。

6区⑥ SDO3は、6区⑥北東隅で確認したもので、土層の堆積状況から流路跡で、東から西へと流れていたと判断される。6区⑤ではこれに続く流路跡は明確なかたちで確認されていないが、SDO3の延長上で土器群や矢板、SDO2が存在し、調査区北壁の土層で流路状の落ち込みが認められることから、これらをつなぐかたちで流路が存在したと考える。6区⑤ではこの東側にも帶状に土器群が分布しており、この延長上の調査区北壁・南壁のそれぞれで流路跡を示すような堆積が見られることから、この部分にも流路があったと推測される。これら2本の流路に対応するものは東側の6区②・④では確認されておらず、その方向性から6区②と④の間、もしくは6区④と⑥の間を流れていたようである。

土坑や土器群については各調査区で検出している。これらについては、廃棄土坑や貯蔵穴の機能が想定されよう。分布状況から、第132図に破線で示すかたちでグルーピングすることができそうである。建物跡と土坑群は近い位置関係にあるものの、重複がほとんど見られないことから、両者は意識的に区別されて配置されたものと推測できる。

## (3) 遺構の時期・前後関係

集落の様相を検討する上で、遺構の前後関係を把握することは重要なことである。ここでは出土遺物や遺構の切り合い関係、遺構配置から主な遺構の前後関係について検討することとしたい。

6区⑥ SBO1は、掘り方埋土や掘り込み面とほぼ同じレベルで草田4期の土器が出土している。また、この北側では柱根残存部の上端とほぼ同じくらいのレベルで検出した土器群1は、建物構築後から廃絶後でも間を置かない（掘り込み面上部に出た柱根が腐らない）段階で形成されたと考えられるもので、草田5～6期の土器で組成されている。

SBO1の南側にはSDO1が掘られており、溝の底に近いレベルでは草田4期の土器が、高い位置

では草田4～6期の遺物が出土している。SDO1は最大で草田4～6期の時期幅を持つ可能性があるが、両者が近接しあっていることから、SDO1が掘削されてから埋まり切らない間にSB01が建てられたとは考えがたい。よって、SB01がSDO1に先行して構築されたと考える。

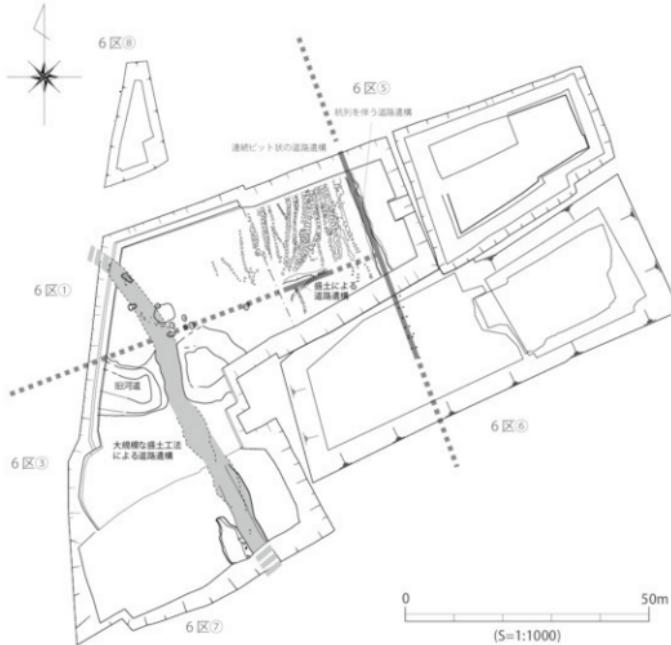
SDO1の埋没後には、これを切るかたちでSB05の掘り方が掘られている。このことからSB05は草田6期以降に建てられたことが分かる。

SB03については時期的な手掛かりがないが、建物の主軸方向はこの北側にのびるSDO1とほぼ平行していることから、これと同時期に存在した可能性がある。また、SB02も出土遺物に乏しく時期が明確ではないが、主軸方向がSB03のそれとほぼ同じであり、方向を意識して建てられたとすれば、SB03と共に存したと考えられる。

以上の検討から、6区⑥の範囲では同時期に存在した建物は1～2棟であり、これに土坑群・土器群が共存していたと推測する。

### 3. 古代～中世初頭の遺構

6区①・③では、8世紀後葉を中心とする時に南北方向にのびる道路遺構が構築されている。この道路遺構は、旧河道部分に杭を打ち込み、横木を絡ませながら、礫を混在させた盛土で構築されており、法面には礫が葺かれている。この南側の6区⑦では道路遺構の延長線上に溝状遺構が確認されており、道路構築時の整地に伴うものと考えられている。この部分も含めた道路の総延



第133図 山持遺跡6区古代の遺構

長は 65m となる。

道路遺構の盛土以前の旧河道堆積層や、盛土中、盛土後の堆積層には墨書き土器・木簡などを含む遺物が出土している。中には吉祥天女を描いたとされる板絵も存在し、吉祥天女信仰にかかわる仏教行事が地方や村落に受容されていく様相を示す具体的な資料として評価される。

この東側の 6 区⑤では南北方向にのびる連続ピット状の道路遺構が幾筋もの列をなして検出された。時期は明確ではないが、検出面から奈良～平安時代のうちに形成されたと考えられる。

黒色腐植土層直下では、6 区⑤で、杭列と畦状の盛土を作う南北方向の道路遺構と、砂質土で盛土された東西方向の道路遺構が確認されており、両者はほぼ直交している。また、6 区⑥では南北方向の道路遺構の延長上で 2 条の杭列を検出しており、これと一連のものであったと考えられる。6 区①では平面的には検出してないが、調査区西壁の土層断面で、黒色腐植土層の下面に畦状の高まりが認められ、この部分にも同様の遺構が存在した可能性が高い。これらの時期は、腐植土層の下面で検出されたことから古代末～中世初頭頃とみられる。7 区⑥でも黒色腐植土層の下面で幅 2 ～ 4m の畦状遺構を検出しているが、これらとほぼ平行もしくは直交している。7 区を含めた全体の様相については次章で検討したい。

6 区では、道路遺構（畦状遺構）以外には古代の遺構はほとんど確認されておらず、土壤分析から古代には水田など耕作地として利用されたことが明らかになっている（第 7 章第 3 節参照）。

#### 4. 中世後半～近世初頭

中世には山持遺跡周辺は湿地化しており、これに伴い黒色腐植土層が堆積している。6 区①・③では黒色腐植土中から卒塔婆状木製品が出土しており、周辺で葬送儀礼・供養行為がなされたと考えられる。

黒色腐植土層の上層では、6 区①・③・④・⑥・⑦の調査区内あるいは調査区壁面の土層断面で、北東～南西方向にのびる河道跡を確認している。この河道跡は、現在自然堤防上の高まりとなっている市道に沿って流れていたものと想定され、この地点の北東に位置する伊努谷から流れ出た「伊努谷川」の旧河道であった可能性がある。

河道跡の堆積は大きく見て 2 段階に分けられる。古段階の河道は近世の洪水堆積層よりも下で形成されているのに対し、新段階の河道はこの洪水堆積層を切っている。河道堆積層の上半部は重機で除去したため、実際に発掘調査をしたのはほぼ古段階の河道跡に相当すると考える。河道跡の時期は、15 世紀後葉～16 世紀前葉の青磁稜花皿が出土していること、河道で出土した木製品や河道に伴う杭の放射性炭素年代が曆年較正年代で 15 世紀中頃～17 世紀中頃の年代を示していることから、中世後半～近世初頭頃と推定される。

河道跡からは木製品や鉄製品などが出土しており、この中には卒塔婆状木製品もあった。また、2 体分の人骨も確認されており、河道の周辺で葬送儀礼が行われたものと推測される。

このほかに 6 区⑥では黒色腐植土層を切って掘り込まれた南北方向の溝（SD07）があり、南は河道とぶつかっていた。この溝の性格については不明確だが、北側の北山から南に流れた小河川の一つで、水田等に伴う水路として利用された可能性も想定される。 （東山信治）